

「JP1」「OpenTP1」の活用によりメインフレームの工場系システムをオープン化。既存の全機能を継承し、「SANRISE」にDBを統合して新しい経営基盤を実現

グラスファイバーなどでトップレベルのシェアを誇る日東紡績株式会社（以下、日東紡）では、福島工場のメインフレームがリプレース時期を迎えたのを契機に、オープンシステムへ移行した。メインフレーム上の工場系システムの機能をそのまま継承すると同時に、東京本部で管理している販売系システムを取り込んでリアルタイムに連携させ、タイムリーな在庫引き当てができるようになった。データベースを東京と福島で二重化し、ディザスタリカバリ体制も実現できた意義は大きい。日立の統合システム運用管理ソフトウェア「JP1」と分散トランザクションマネージャ「OpenTP1」の組み合わせにより、メインフレームで実現できていたことをもれなくオープンシステムへ移行し、なおかつ、新しい経営基盤へと進化させることに成功したのである。



日東紡績株式会社
情報システム部
部長
酒井 好男氏



日東紡績株式会社
情報システム部
課長
岡 賢氏



日東紡績株式会社
情報システム部
福島システムグループ
スタッフ
菅野 虎宇一氏



株式会社 日立東日本ソリューションズ
東北ソリューション営業本部
クロスマーケットグループ
技師
盛 義弘氏

製販一体物流を実現する システム基盤作り

新事業創造を社風とし、多角経営を進めてきた日東紡。連結関連会社が国内20社・海外6社を数えるなかで、1999年には「ドメイン経営」を打ち出した。会社ごとに個別経営を行うのではなく、系統別/分野別に協調し、一体となってグループシナジーを追求していくという経営コンセプトである。

「関連会社が作った製品を日東紡が販売するなど、一体となった新しいグループ物流に取り組んでいます」と酒井氏は語る。

新しい物流には新しいシステムが不可欠だ。グラスファイバーの生産拠点である福島工場で、1997年から稼働してきた日立のメインフレームがリプレース時期を迎えたのを契機として、製販一体化に向けたシステム再構築が始まった。

データベースを二重化して ディザスタリカバリ

福島工場のシステム再構築は、一石三鳥をねらったものだ。

第1に、福島工場の生産システムに東京本部の販売系システムも取り込んでリアル

タイム連携を実現する。

販売系システムは、2000年にオープンシステムで再構築済みだ。したがって福島工場のシステムもオープン化して連携させる。データベースも日立のディスクアレイサブシステム「SANRISE」に統合して、在庫引き当てをスムーズにする。従来はバッチ処理でデータ連携させていたため、30分ぐらいのタイムロスがあった。

「工場系と販売系でマスターDBも共通にします。グループ各社が共通なマスターを参照・更新することで、処理の効率化を図るとともに、アプリケーションを一本化することをねらっているのです」と、岡氏は説明する。

第2はディザスタリカバリ。通常時でも24時間稼働が求められる工場系システムだが、さらに災害時にもビジネスを継続するために、東京/福島という遠隔地間でデータを二重化することにした。

第3に、今回対象となるシステム以外でも40台近いサーバがあり、それらも統合してTCOを削減したいという思いもあった。

こうした数々の課題を実現しつつも、メインフレームで稼働してきた工場系システムのプログラムは変えないというのが大前提だった。この手作りシステムには、過去数十年にわたって工夫を凝らしてきたノウハウが

